九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

学校コミュニティのアセスメント・見立ての視点の検討

和田, 志麻
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/1448777

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 1, pp.147-158, 2010-03-01. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学総合臨床心理センター紀要，2009，第1号，147－158頁
Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu U., 2009, Vol.1, pp147－158

学校コミュニティのアセスメント・見立ての視点の検討

和田志麻*

学校コミュニティのアセスメント・見立てのツールを作成する準備として、次の2つの研究を行った。研究1では、自由記述によって27名のスクールカウンセラー（SC）からアセスメントの視点を収集した。そして、項目同士の類似性と、その項目が資料から得られる客観的事実か、SCの臨床経験が必要な主観的事実かという観点によって分類した。研究2では、3名のSCがさらにいくつかの視点を追加した。最終的に、当該勤務校1年目のアセスメントについて113項目、2年目以上の継続校について32項目が収集された。その項目を、13名のSCがA（初心者にもアセスメント可能で必須なもの）、B（3年目以上の経験が必要なもの）、C（重要性が低いもの）、D（評定不可能なもの）に評定した。考察では、SC初心者向けのアセスメントツールを作成していく方法と、SCが行う学校コミュニティアセスメントの評価への貢献について言及した。
キーワード：スクールカウンセラー　アセスメント　初心者

問題と目的

近年、スクールカウンセラー（SC）の活動は、生徒・保護者への援助や教師とのコンサルテーションというだけでなく、学校コミュニティへの援助だという見方がある（伊藤、2004）。学校コミュニティへの援助では、対個人援助と同様に、見立てやアセスメントが必要である。鵜飼（1995）は、臨床心理士が学校コミュニティに新規参入する際の留意点のなかに、見立ての視点を多く取り入れている。また徳田（2003）も、学校臨床心理学の入門書のなかで、1章を学校の見立てとアセスメントに割いている。さらに鵜飼（2004）は、スクールカウンセリングにおけるアセスメントに関する研究から、“臨床現場としての学校の見立て”に必要な視点を述べている。このように、学校コミュニティへの援助においては、見立てやアセスメント（以下、アセスメントとのみ表記）が重要視されているといえる。

また、学校をアセスメントするスキルは、実践の当初から必要である。臨床実践はニーズに応えて行われるものであるから、実践の当初にはニーズの検討が行われるだろう。瀬戸ら（2003）はSC活動モデル構築の展望を述べる中で、ニーズアセスメントには、学校組織全体を一つの事例として把握する技能が必要であると述べている。つまり、ニーズのアセスメントにも学校のアセスメ

* 九州大学大学院人間環境学府

ントスキルが必要ということだろう。

スキルには、前述した見立ての視点（鵜飼、1995）の利用も含まれると思われる。しかし多くのSCにとって、アセスメントの視点を知識として理解することはできても、実際に行うのは簡単ではないだろう。まず一般的に、実践しつつ、常に全ての視点を念頭におくのは難しい。学校コミュニティのアセスメントについて詳細に調べた研究はみあたらないが、アセスメントのための情報を得た後も、情報の取捨選択などの過程が存在するかもしれない。このようなアセスメントのスキルは、本来ならば他の領域の臨床技術と同じく、経験を積みながら熟達していくものと考えられる。ところが、SCは単年度更新の非常勤職であり、SC3年目を前に職を離れる者が60%弱いることが、一部で指摘されている（愛知県臨床心理士会、2005）。さらにSCは、毎年多くの修士課程修了者や臨床心理士資格取得直後の者が参入する職でもある（日本臨床心理士会、2006）。つまりSCは、経験によって数々の知識を臨床的に活用できるようになった者、技能の熟達した者が少ない職になっていると考えられる。新任者がベテランと同じような仕事を行うことは、現実には非常に難しい。文献で紹介される視点もベテランのもので、初心者がすぐにそれらを身につけられるかといえば、そうではないだろう。つまり、学校コミュニティのアセスメントスキルを、経験によって自然に学んでいくことは、困難と考えられる。

では、スキルを学ぶには、経験による以外に、どのような学び方や身につけ方があるだろうか。まず、冒頭にあげたような文献による学びがある。次に、学校臨床心理士全国大会や心理臨床学会のワークショップへの参加があげられるだろう。各県の臨床心理士会の研修会などもある。その他、SCの事例報告の中で学ぶこともあるだろう。しかし、これらは基本的に現場から離れた場所と時間で行われる一回きりのものである。文献は何度も参照できるが、勤務中にそう何度も読むわけには行かない。可能であれば常に手元において、一見して思い出せるものがあることが望ましい。すなわち、実践をより行いやすくするための「ツール」である。例えば、学校での危機介入については、「学校コミュニティへの緊急支援の手引き」（窪田ら、2005）という簡潔なマニュアルがあるが、そこには資料として“緊急支援プログラムの流れ（行うべきことのチェックリスト）”が含まれている。これは、実際にその場で用いて活動の流れを導くことのできるツールである。また、中村（2003）は、“学校での打ち合わせチェックリスト”を考案している。一方、そのような学校コミュニティのアセスメントに関するツールは、筆者の知る限り存在しておらず、円滑で質の高い見立て活動のために、作成されることが望まれる。本研究の目的は、そのツール作成のための準備である。

上述のチェックリストは、主にその識者の経験と文献に基づくものであろうと考えられる。その場合、どうしても視点の見落としがある可能性は捨てきれない。本研究では、見落としのないように、調査という形でSCの臨床知を集積する。また、先行文献で示されたアセスメントの視点や方法は、いずれもベテランの臨床家のものである。ベテランの視点は当然、目指すべき目標として存在すべきであるが、一方で初心者の能力を考慮したスモールステップの目標も必要と考えられる。また、勤務時間が限られている以上、重要な視点を精選し、明確にしておくことは、初心者の道標になり、複雑でどこから手をつけていいかわからなくなるSC実践の中身をより具体的にし、構造

化する手助けになると思われる。さらには、効率良い活動にも貢献するだろう。つまり、アセスメントの視点や方法について、初心者を考慮して作成していくことが望ましいと考える。

以上より本研究では、「新任者からベテランのSCまでが、学校コミュニティアセスメントの際に直接参照できるツール」作成に向けた準備段階として、アセスメントについての示唆を得ることを目的に、2つの研究を行う。研究1は、SCが実際にどのような視点をもって学校をアセスメントしているか調べ、できるだけ多くのアセスメント項目を抽出する。また、その内容を質的に大まかに把握する。研究2は、特に初心者に必要な項目とはどのようなものか、検討する。

研究1

方法

回答者は、A県の2006年度SC研修会に参加した27名のSCである。回答者のSC経験の範囲は、5ヶ月（1年目）～137ヶ月（12年目）、平均は43.04ヶ月（*SD*=43.85）であった。また、SC1年目が9人、2～4年目が10人、5年目以上が8人であった。なお、この研修会はA県の臨床心理士会が主催しているものであり、回答者は臨床心理士か、そのキャンディデイトである。

方法は、自由記述形式の質問紙法であった。研修会冒頭の10分間を利用して一斉に実施した。質問は、次の3つであった。：質問1「あなたのSC経験年数をお答えください」質問2「あなたは4月、新しい学校に赴任しようとしています。勤務校が、SCの活動という視点からみてどのような学校かを捉えるために、あなたは学校のどんなところに注意を向けますか。思いつくままに書いてください。箇条書きでも構いません。また、その理由もできる範囲でお答えください」質問3「あなたは4月、前年度と同じ学校に勤務することになりました。あなたは、学校のどんなところに注意を向けますか」

結果と考察

記述を、学校の特徴を示す最小単位に分割した結果、初年度の注目点として67項目が得られた（研究1で得られた項目は研究2に使用されている。項目内容はTable1・Table2を参照）。項目の性質を分析するため、筆者とSCの経験をもつ臨床心理学を専門とする大学院生1名の合議により、項目を表面的類似に基づいて分類した。得られたカテゴリーは、ハード面（客観的事実：主に資料などで裏づけの可能なもの）とソフト面（主観的事実：主にSCの読み取りが必要であり、SCの認知に大きく影響を受けるもの）に分けた。これは、資料などで得られる情報ならば初心者にも比較的得やすいが、SCの認知に影響を受ける項目の情報は、SC自身が経験を積むにつれて可能になると考えられ、難易度が高いと考えたからである。どちらの情報がどの程度必要なのかを検討することで、アセスメント活動への経験の影響について示唆を得られると考えた。その上で、ハード面とソフト面の中でさらに分類し、下位カテゴリーを作成した。また、以下、カテゴリー名は「」、項目は『』で示す。

分類の結果、「A：学校概要（15項目。以下、括弧内は項目数）」「B：地域（8）」「C：SC（16）」「D：生徒指導・教育相談（11）」「E：日常生活（17）」の5つのカテゴリーが生成された（以下大

Table 1　初年度の視点

番号	項目内容	A 回答数	A %	B 回答数	B %	C 回答数	C %	D 回答数	D %
1　地域状況の把握									
1-1	人口	8	62	1	8	4	31	0	0
1-2	歴史	8	62	2	15	3	23	0	0
1-3	文化	8	62	3	23	2	15	0	0
1-4	県庁所在市内かそれ以外か	6	46	1	8	6	46	0	0
1-5	行政組織	8	62	2	15	3	23	0	0
1-6	住民サービス	2	15	5	39	6	46	0	0
1-7	学区の鉄道・道路など都市インフラの状況	7	54	2	15	3	23	1	8
1-8	学校付近の施設	8	62	2	15	2	15	1	8
1-9	産業の傾向〈工業地帯・農業・商業・住宅など〉	8	62	2	15	2	15	0	0
1-10	失業率	6	46	4	31	2	15	1	8
1-11	教育関係者の情報	4	31	6	46	1	8	2	15
1-12	地域住民の情報	4	31	7	54	1	8	1	8
1-13	その地域に多い家族形態	8	62	5	39	0	0	0	0
1-14	保護者の生活水準	9	69	4	31	0	0	0	0
1-15	地域に保護者の関係する産業があるか	6	46	5	39	2	15	0	0
1-16	地域の関連機関の特色と学校との関係	6	46	6	46	1	8	0	0
1-17	学童保育の有無	9	69	1	8	3	23	0	0
1-18	地域住民の学校運営・学校行事への参加状況	6	46	6	46	1	8	0	0
1-19	地域で起こった事故・事件	6	46	7	54	0	0	0	0
1-20	祭り等地域の行事	6	46	3	23	3	23	1	8
2　学校の歴史および教育課題									
2-1	生徒数・職員数	13	100	0	0	0	0	0	0
2-2	中学校区の小学校数と小学校の特徴	11	85	2	15	0	0	0	0
2-3	生徒の転入・転出の特徴（多いかどうかなど）	11	85	2	15	0	0	0	0
2-4	教員の平均年齢・男女比	7	54	3	23	3	23	0	0
2-5	教員の当該校の勤務年数	8	62	1	8	4	31	0	0
2-6	教員の教職年数	6	46	4	31	3	23	0	0
2-7	教科の指導体制〈習熟度別、少人数制等〉	7	54	5	39	1	8	0	0
2-8	進路状況	11	87	2	15	0	0	0	0
2-9	不登校生徒数	13	100	0	0	0	0	0	0
2-10	非行・暴力問題の実態	11	85	2	15	0	0	0	0
2-11	発達障害等をもつ生徒の数	12	92	1	8	0	0	0	0
2-12	いじめの発生状況	11	85	2	15	0	0	0	0
2-13	学校での事故・事件・危機の歴史	5	39	8	62	0	0	0	0
2-14	保健室の利用状況	13	100	0	0	0	0	0	0
2-15	生徒の別室登校の状況	13	100	0	0	0	0	0	0
2-16	生徒指導・教育相談活動の実態	10	77	3	23	0	0	0	0
2-17	教員研修の実施状況	6	46	5	36	2	15	0	0
2-18	特別支援教育学級の有無	13	100	0	0	0	0	0	0
2-19	特別支援教育学級の担当教員が専門的知識を持っているか	8	62	5	39	0	0	0	0
2-20	保護者の授業参観・懇談会への参加状況	5	39	6	46	2	15	0	0
2-21	SC 担当の性別・教職年数	10	77	1	8	1	8	1	8
2-22	教育相談に関わる組織の様子と分掌での位置づけ	10	77	2	15	1	8	0	0
2-23	面接する際のシステム	10	77	3	23	0	0	0	0
2-24	相談室の環境整備状況	10	77	3	23	0	0	0	0
2-25	相談室の利用状況	12	92	1	23	0	0	0	0
2-26	前任の SC の活動	12	92	1	8	0	0	0	0
2-27	SC と学校の情報共有等の場の有無	12	92	1	8	0	0	0	0
2-28	地域の教育・医療・相談機関との連携の様子	7	54	6	46	0	0	0	0
2-29	教育委員会・教育事務所等との連携の様子	5	39	7	54	0	0	1	8

		A		B		C		D	
番号	項目内容	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
3　学校風土・学校文化									
3-1	学校の校風	9	69	4	31	0	0	0	0
3-2	学校の構造・配置	9	69	2	15	1	8	1	8
3-3	年間行事	11	85	2	15	0	0	0	0
3-4	校内の清掃状態	11	85	1	8	1	8	0	0
3-5	職員室の雰囲気	12	92	1	8	0	0	0	0
3-6	生徒の登校時間	11	85	1	8	1	8	0	0
3-7	生徒の通学の手段	9	69	1	8	3	23	0	0
3-8	職員朝会の間の生徒の過ごし方	5	39	5	39	2	15	1	8
3-9	生徒の雰囲気	13	100	0	0	0	0	0	0
3-10	集会での生徒全体の様子	9	69	2	15	2	15	0	0
3-11	生徒への教師の対応の様子	9	69	4	31	0	0	0	0
3-12	不登校児に対する教師の見方	12	92	1	8	0	0	0	0
3-13	生徒が授業を受けている様子	11	85	0	0	0	0	2	15
3-14	生徒のあいさつの様子	10	77	2	15	1	8	0	0
3-15	生徒の掃除時間の様子	12	92	1	8	0	0	0	0
3-16	部活動に対する教師の熱心さ	9	69	2	15	2	15	0	0
3-17	部活動が全員参加かどうか	11	85	1	8	1	8	0	0
3-18	教職員の教育相談への理解	6	46	7	54	0	0	0	0
3-19	教員研修に対する教員の態度	2	15	10	77	1	8	0	0
3-20	保護者の教育に対する関心	5	39	8	62	0	0	0	0
3-21	相談室の場所	12	92	1	8	0	0	0	0
3-22	これまでの SC に対する教師の印象	9	69	4	31	0	0	0	0
3-23	SC に校内を案内したか	8	62	1	8	4	31	0	0
3-24	SC 担当の SC への関わり方	11	85	2	15	0	0	0	0
3-25	生徒の SC を見る目の様子	8	62	5	39	0	0	0	0
3-26	学校が SC のやり方を受け入れるか	7	54	4	31	0	0	2	15
3-27	生徒間に流れる学校・教師についての噂	2	15	9	69	1	8	1	8
4　校長のニーズ、一般教職員のニーズ、行政のニーズ									
4-1	校長の考え方・目指すもの・ニーズ	10	77	3	23	0	0	0	0
4-2	教頭の考え方・目指すもの・ニーズ	9	69	3	23	1	8	0	0
4-3	養護教諭の考え方・目指すもの・ニーズ	11	85	1	8	1	8	0	0
4-4	SC 担当者の考え方・目指すもの・ニーズ	10	77	3	23	0	0	0	0
4-5	生徒指導担当の考え方・目指すもの・ニーズ	11	85	1	8	1	8	0	0
4-6	事務長の考え方	1	8	3	23	8	62	1	8
4-7	SC の勤務時間・勤務日の日程に対する考え方	9	69	3	23	1	8	0	0
4-8	教員の困っていること・ニーズ	9	69	4	31	0	0	0	0
4-9	教育委員会・教育事務所等のニーズ	2	15	8	62	2	15	1	8
5　コミュニティ成員間のコミュニケーションや人間関係									
5-1	管理職と職員の関係	5	39	8	62	0	0	0	0
5-2	教員間の人間関係	3	23	10	77	0	0	0	0
5-3	生徒間の人間関係	4	31	8	62	1	8	0	0
5-4	教員と生徒の関係	10	77	3	23	0	0	0	0
5-5	職員の意志の疎通性	5	39	8	62	0	0	0	0
5-6	生徒の対人関係のあり方	5	39	6	46	0	0	2	15
5-7	保護者と教員の関係	5	39	8	62	0	0	0	0
5-8	PTA と学校の関係	2	15	9	69	1	8	1	8
5-9	養護教諭と他の成員の関係	6	46	6	46	0	0	1	8
5-10	教員の学年団同士の関係	3	23	10	77	0	0	0	0
5-11	困りごとの相談をよく受ける教師	4	31	8	77	0	0	0	0

番号	項目内容	A 回答数	A %	B 回答数	B %	C 回答数	C %	D 回答数	D %
6 その他									
6-1	SC の協力者となりうる教師は誰か	12	92	1	8	0	0	0	0
6-2	職員室の SC の席の有無	12	92	0	0	1	8	0	0
6-3	相談室の電話が外線につながるか	9	69	2	15	2	15	0	0
6-4	職員室のパソコンは自由に使えるか	9	69	0	0	4	31	0	0
6-5	教育委員会との関係	1	8	7	54	3	23	2	15

注：%は小数第一位を四捨五入。よって合計が 100% にならないこともある。

Table 2　継続年度の視点

番号	項目内容	A 回答数	A %	B 回答数	B %	C 回答数	C %	D 回答数	D %
1　地域状況の把握									
1-1	教育行政の変化	3	23	7	54	1	8	0	85
2　学校の歴史および教育課題									
2-1	職員の入れ替わり状況	9	69	3	15	0	0	0	0
2-2	新しい学年の分掌などの担当者	9	69	0	0	2	15	1	8
2-3	SC の位置付け（分掌）	11	85	1	8	0	0	0	0
2-4	校長等の今年の方針	10	77	1	8	1	8	0	0
2-5	クラス数の変化	11	85	1	8	0	0	0	0
2-6	クラスの変更状況・クラス分けの状況	10	77	2	15	0	0	0	0
2-7	前年度の活動を通して SC が学校からどのような印象をもたれたか	9	69	3	23	0	0	0	0
2-8	SC と学校との情報共有等の場の有無	12	92	0	0	0	0	0	0
2-9	継続ケースについて教員と共通理解があるか	11	85	1	8	0	0	0	0
2-10	前年を通しての、学校側の SC の利用法の確認	10	77	2	15	0	0	0	0
2-11	相談室のあり方などの PR がなされているか	9	69	3	23	0	0	0	0
2-12	校長・教頭・相談担当者で本年度計画の策定がなされているか	6	46	6	46	0	0	0	0
2-13	学校が、昨年度の SC 活動の反省に立った本年度活動計画をたてようとしているか	4	31	7	54	0	0	0	0
3　学校風土・学校文化									
3-1	学校内の各教室の場所	8	62	2	15	2	15	0	0
3-2	今年度の大きな行事など（○○周年記念、研究指定校の有無）	11	85	1	8	0	0	0	0
3-3	管理職、教師の異動による学校全体の変化	8	62	4	31	0	0	0	0
3-4	教育相談体制に対する教員の理解の変化	5	39	7	54	0	0	0	0
3-5	学年の印象・雰囲気の変化	8	62	4	31	0	0	0	0
3-6	集会等での新入生の様子	9	69	2	15	1	8	0	0
3-7	集会等でみられる、1学年あがっての2、3年生の雰囲気の変化	4	31	7	54	1	8	0	0
3-8	新年度の体制に対する生徒の適応状態	7	54	5	39	0	0	0	0
3-9	新年度の体制に対する職員の適応状態	6	46	6	46	0	0	0	0
3-10	相談室の場所の再確認	10	77	0	0	2	15	0	0
4　校長のニーズ、一般教職員のニーズ、行政のニーズ									
4-1	各成員の新しいニーズ	3	23	8	62	0	0	1	8

		A		B		C		D	
番号	項目内容	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
5 コミュニティ成員間のコミュニケーションや人間関係									
5-1	教員の人間関係の変化	4	31	8	62	0	0	0	0
5-2	新しく赴任した教師	9	69	3	23	0	0	0	0
5-3	PTA 役員の変化	1	8	5	39	5	39	1	1
5-4	昨年問題があった生徒について、新しい担任へ情報伝達があっているか	8	62	4	31	0	0	0	0
5-5	生徒の人間関係の変化	6	46	5	39	0	0	1	8
5-6	SC と SC 担当教員との関係が 1 年を通してどうなったか	8	62	3	23	0	0	0	0

カテゴリーと記す)。まず「A:学校概要」では、ハード面として『生徒数』などの「学校規模」、『教員の年齢』などの「教員の構成」、「学校設備」の下位カテゴリー（以下小カテゴリーと記す）が含まれる。ソフト面では、「人間関係の性質」「キーパーソンの特性」が得られた。これらは、学校に関する最も基礎的な内容と考えられる。「B：地域」では、ハード面として『地域に特徴的な産業』なども含めた「生活水準」、児童相談所などの「社会資源」、学校の傷になりうる事件があったかどうかの「危機」が、ソフト面として保護者などの「教育への関心」が得られた。地域に関する視点がカテゴリーになるほどに多かったことは、学校をコミュニティとして理解する近年の流れが、SC 自身にとっても現実的なものであることを裏付たといえるだろう。「C：SC」では、ハード面で「相談システム」「職員室の設備」「SC の位置づけ」、ソフト面で「ニーズ」「SC への先入観」「D：生徒指導・教育相談」では、ハード面で「活動の実態と生徒の現状」、ソフト面で「SC の受け入れやすさ」「E：日常生活」は、ハード面で「学校生活のきまりと慣習」「学習体制」、ソフト面で「生徒の性質」「対生徒の教師の性質」となった。この大カテゴリーも、単に不登校などの生徒に関わるだけではなく、コミュニティとしての学校に関わる SC の姿勢がうかがわれる。

質問 3 への回答を質問 2 と同様に分析した結果、継続年度の注目点として 33 項目が得られた。それを、質問 2 で作成された大カテゴリーに分類した。項目数が少なかったため下位カテゴリーは作成しなかったが、「A：学校概要（13)」では『職員の入れ替わり』などの構成員の変化や、研究指定校など『年度の大きな行事』への視点が得られた。「B:地域」では新たな視点は得られなかった。「C：SC（6)」では、ハード面に関して、『SC の利用法の確認』など活動内容の確認や、ソフト面では、『前年度を通じた SC がどう受けとられ方の変化』などの視点が得られた。「D：生徒指導・教育相談（6)」では、ハード面で『管理職や相談担当者と本年度計画の策定がなされているか』、ソフト面で『相談体制に対する学校の理解の変化』や、『新しい担任への情報伝達があっているか』などが得られた。「E：日常生活（8)」では『クラスの変更状況』や、集会などでの新入生及び一学年あがった 2・3 年生の雰囲気の変化への視点などが得られた。

また、ハード面とソフト面の項目数の割合は、初年度で 32：35、継続年度について 15：18 であり、ほぼ同数であった。当初、筆者は SC のアセスメントは、経験により熟達する主観的認知が量的にも重要と考えていたが、調査結果からは、資料などによって確認できる客観的事実の重要性が示唆された。経験が特に必要になるのは、情報を収集した次の過程ということも考えられるだろう。

研究1では、多くの視点を集め、大まかに分類した。その結果、学校をコミュニティとみて援助する視点が確認され、また、客観的事実も重要視されていることが示唆された。研究2では、初心者にとって重要な項目について検討する。

研究2

目的

研究2は、アセスメントの視点のうち初心者でも必要で、かつ可能であると思われる必須な視点と、特に経験がなければ難しい視点に暫定的に分類し、初心者を考慮したツールを作るための示唆を得ることが目的である。研究1で収集した項目には、学校像を得るために必須の重要なものから、重要度の低いものまで様々なものが含まれていると思われる。現場では“動きながら考える『見立てる』”（田嶌、1995）ことが必要であり、それを行うためには、優先順位を決め、ある程度のところで次の活動に移っていかなければならない。当然、ある活動をしている間他の活動ができないというものではなく、情報収集やアセスメントは継続的に行われる。しかし、まず活動を行っていくために最低限必要な視点を選んでおくことは、初心者が方針を定め、活動を効果的に行うために役立つだろう。

方法

調査票の作成段階で、次の作業を行った。まず、鵜飼（2004）の示した見立て内容の分類に従って、研究1で収集した項目を大まかに分類した。次に、項目内容に漏れがないようにするため、中学校のSC経験2年目、3年目、8年目のSC3名が既存の項目を検討し、足りない項目を追加した。これにより、『教員と保護者の関係』など9項目が追加された。最終的に得られた項目は、初年度について103項目、継続年度について32項目であった。これらには前述した、鵜飼（1995）、鵜飼（2004）、徳田（2003）で扱われた内容も含まれており、今回は、これまでより広い範囲の視点を集めることができたといえるだろう。

その各項目を、SC経験1～2年目6名、3年目～6年目3名、7年目～10年目4名、年齢24～57歳が、次の教示に従って分類した：「今回皆様にお願いしたいのは、それぞれの項目を『A：SC初心者（SC2年目まで）でも情報を収集することが可能であり、学校コミュニティのアセスメントにおいて必須の視点』『B：SC初心者には情報収集が難しく、3年目以上の経験を積むにつれて、アセスメント可能になることが望ましい視点』『C：A・Bに比べて優先度が低い視点』のどれかに評定することです。あなたのSC経験から、この評定を行ってください。」

なお本研究では初心者を、SC経験が2年目までの者とした。これは、先述した愛知県の調査でSC2年目までで職を離れる者が多かったことや福岡県臨床心理士会では、2年目までSVが義務付けられていることから、2年目までにある程度のスキルを身につける必要があると考えられたからである。

結果と考察

回答者の分類結果を、Table1（初年度）とTable2（継続年度）に示した。まず、全体の傾向を示

すために、A・B・C・Dの評定の中で最も高い割合の回答者を獲得した評定の項目数を述べていく。初年度について、Aは78項目、Bは21項目、Cは2項目、Dは0項目であった。A・Bで同数が1項目、A・Cで同数が1項目であった。継続年度は、Aが23項目、Bが6項目、C・Dが0項目であった。A・Bで同数なのが2項目、B・Cで同数なのが1項目であった。つまり、全体として、評定はAに偏っていた。初心者でも、多くの視点が必須かつ可能であると、回答者は考えているようであった。しかし、78項目という数は、初心者に最低限必要であるとするには、多過ぎると思われる。

次に、A～Cの評定について、割合が高かった項目をみていく。Aでは、70%以上の項目が35項目あった。100%Aだったのは、初年度について『生徒数・職員数』『不登校生徒数』『保健室の利用状況』『生徒の別室登校の状況』、継続年度について『SCと学校との情報共有等の場の有無』『継続ケースについて教員と共通理解があるか』のみであった。70%～99%の項目には、『発達障害等をもつ生徒の数』『相談室の利用状況』『前任のSCの活動』など様々なものがあった。分類においては「2　学校の歴史および教育課題」にあてはまるものが18項目、「3学校風土・学校文化」が12項目、「4　校長のニーズ、一般教職員のニーズ、行政のニーズ」が1項目など、学校の教育課題や風土が重視される傾向にあると思われる。継続年度も、その傾向は同じであった。『SCと学校との情報共有等の場の有無』『SCの位置付け（分掌）』『クラス数の変化』などが70%以上の割合を獲得していた。総じて、これらは、SC活動に直接影響を与える事柄と思われた。

Bにおいては、最高77%の回答者を獲得したものは、『教員研修に対する教員の態度』『教員間の人間関係』『教員の学年団同士の関係』であった。3年目以上になると、教員の特性も重要視されるようである。60%以上の項目でみると、8項目が「5　コミュニティ成員間のコミュニケーションや人間関係」のカテゴリーの項目であり、コミュニティの成員の関係などが入ってきている。継続年度では、50%以上の6項目に5つのカテゴリーが1つずつ入っていた。これらは、直接SC活動の内容を大きく変えうるというよりは、SC活動の影響や効果を左右する要因のように思われる。

Cにおいては最高が62%で、『事務長の考え方』であった。以下、初年度で『人口』『住民サービス』などの地域関連項目、『教員の当該校の勤務年数』『SCに校内を案内したか』などがあった。継続年度では、『PTA役員の変化』において、39%とCと同数であった。

また、B～Dのいずれについても、100%評定が一致したものはなかった。13名の回答者でさえこのように評定が割れるということは、どの視点が重要かについて、SC集団内で認識が共有されていないことを示唆すると考えられる。

以上を振り返ると、SC活動に直接影響を与える項目が可能で必須とされ、経験を積むにつれて、複雑な人間関係や活動の周辺まで視野に入れることが望ましいという認識がうかがわれる。最終的に学校をアセスメントする際は、Aとされたような直接影響する項目が中心になるであろう。

しかし、研究2では教示が「情報収集可能であること」「必須であること」と2重の意味になっており、どちらかが強く意識されて回答された可能性がある。結果の解釈が難しいので、今後は、別個の質問として検討するのが望ましいだろう。また、より初心者の回答傾向を考慮して項目を検

討するならば、より多くの初心者に回答してもらう必要があるだろう。特に本研究では、多くの回答者によってAとされた項目が、78項目と多かった。今後はより多くのSCの協力を得て、この中でさらに優先的にアセスメントすべきものを選別していくことが望まれる。

総合考察

本研究は、「新任者からベテランのSCまでが、活動の際に直接参照できるツール」作成に向けた準備段階として、ツール内容についての示唆とアセスメントについての示唆を得るため、2つの研究を行った。研究1では、アセスメント項目を抽出した。また、内容を大まかに把握した。研究2では、特に初心者に必要な項目とはどのようなものかを検討した。結果からは、ツールの内容として、地域も含めた幅広い内容で構成されるべきこと、また、人間関係など臨床経験が必要な内容だけでなく、客観的事実も重視されるべきであることが示唆されたと考えられる。また、多くの視点が初心者にも必要であるとされ、SCという仕事の難しさが改めて示唆されたと思われる。

本研究の貢献として、次の点が考えられる。本研究で収集し、整理した学校コミュニティ理解の視点は、実践時はもちろん、近年検討が始まっているSC評価（野内ら、2006；井上、2008）にも貢献すると考えられる。SC活動のうち面接やコンサルテーションは、日誌などの記録によって回数が明確にわかり、それを評価の対象にすることができる。しかしアセスメントはSC活動の基礎であるが、基本的にSCの認知であり、その影響は他の活動にしか現れないからである。よってこの視点を活用することでアセスメント活動自体を顕在化させ、評価の対象にすることができると考えられる。具体的には、本研究で使用した項目に基づいて学校を見立て、それを学校側へフィードバックすることが可能になれば、それを評価できるようになる。また、そのようにすれば、その年度の学校理解と活動方針を、教員と共有することができるであろう。また本研究では、初心者にも可能で必須な重要項目を検討した。これは、アセスメントにおける最低ラインの明確化の試みでもあると考えられるので、これを基準にSCのSVがアセスメント活動を評価することも可能と考えられる。

引用文献

愛知県臨床心理士会（2005） 学校臨床心理士活動10周年記念誌.

伊藤亜矢子（2004） 学校コミュニティ・ベースの包括的予防プログラム 心理学評論、47（3）、348-368.

井上孝代（2008） 全校参加型スクールカウンセリング－米国のMEASURE法による実践（特集 スクールカウンセラー－小・中学校での役割と実践） 児童心理、62（6）、170-175.

窪田由紀・向笠章子・林幹男・浦田英範（2005）：学校コミュニティへの緊急支援の手引き 金剛出版.

中村泰江（2003） 第3章 学校に入ったら何から始めたらよいか 伊藤美奈子・平野直巳、学校臨床心理学・入門－スクールカウンセラーによる実践の知恵－ 有斐閣、45-60.

日本臨床心理士会（2006） 第４回「臨床心理士の動向ならびに意識調査」報告書.
野内 類・池田満・岡崎琴恵・永井智・飯田敏晴・濱口まち子・本田眞喜子・伊藤武彦・井上孝代（2006） 日本におけるスクールカウンセリング評価（MEASURE）の導入 日本コミュニティ心理学会 第９回大会プログラム・発表論文集、79-80.
瀬戸瑠夏・下山晴彦（2003） 日本におけるスクールカウンセリングの現状分析－文献レビューによる活動モデル構築への展望－ 東京大学大学院教育学研究科紀要、43、133-145.
田嶌誠一、1995、密室カウンセリングよ どこへ行く、教育と医学、43（5）、26-33.
徳田仁子（2003） 第４章 学校臨床における見立て・アセスメント 伊藤美奈子・平野直巳 学校臨床心理学・入門－スクールカウンセラーによる実践の知恵－ 有斐閣、61-83.
鵜飼啓子（2004） スクールカウンセリングにおけるアセスメント、学苑（昭和女子大学人間社会学部紀要）、761、123-128.
鵜飼美昭（1995） スクールカウンセラーとコミュニティ心理学 村山正治・山本和郎 スクールカウンセラー－その理論と展望－ ミネルヴァ書房、62-78.

付　　記

調査にご協力くださったスクールカウンセラーの皆様に、心より感謝いたします.

Evaluation of junior high school climate from multiple perspectives: The development of an assessment tool

Shima WADA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Two studies have been conducted in order to develop an assessment tool for school climate. In the first study, 27 school counselors provided their perspectives on the school climate with the answers to free response questions. The answers were categorized according to similarities and the extent of objectivity based on the clinical experience. In the second study, three counselors provided additional insights into the climate. Consequently, 113 items were developed for the first year of the assignment and 32 items for the second year and beyond. The items developed were categorized into four levels according to the years of experience required for counselors to carry out a proper evaluation. The four levels constitute: A, items in which all counselors should be able to evaluate; B, appropriate for counselors with over three years of experience; C, not important to evaluate; D, impossible to evaluate. Suggestions were provided for the development of an assessment tool for school climate for novice counselors in addition to how counselors could contribute to the evaluation of school climate.

Key words : novice school counselors, assessment tool, school climate